# 災害救援本部通信

No.7

発行日：2012年6月1日
発行所：真宗大谷派宗務所（組織部）
発行人：災害救援本部長 岩坂賢龍


## 東日本大震災救援金についてのお願い

救援金について、引き続き皆さま方のあたたかいご支援をお願い申し上げます。

救援金口座
〈郵便振替口座番号〉**01030-4-2244**
〈加入者名〉**真宗大谷派宗務所財務部（救援金）**

振替用紙の通信欄に**「東日本大震災救援金」**と明記くださるようお願いいたします

田口ランディ氏（作家）と福島出身koyomiさんによるミニコンサート＆トークショー

ディスカッションの様子

2012年4月21日、大谷ホール（京都市下京区）において、宗派共催による「ふくしまキッズ2011年度活動報告会」が開催され、全国から約150名が参加しました。

報告会では、「ふくしまキッズ実行委員会」が、各地で行われた活動内容を報告された他、ディスカッションでは、門川京都市長ら提言者とともに、宗派からも五百井浩ボランティア委員長が出席して、今後の支援を考える情報交換が行われました。

また、宗派からは、3月10日に真宗本廟で開催された「東日本大震災被災者支援のつどい　いのちの響舞台」で募った救援金122万563円を、実行委員会へお届けしました。

本号と次号では、「ふくしまキッズ実行委員会」の吉田事務局長に寄稿いただいた、実行委員会のこれまでの活動と今後の展望についてご紹介いたします。

# 子どもたちの笑顔を取りもどしたい

## 「ふくしまキッズ 2011年度活動報告会」に宗派が共催

### 復興の基盤として心の復興を（上）

ふくしまキッズ実行委員会事務局長
NPO法人教育支援協会代表理事
吉田博彦

このたびの、「ふくしまキッズ」の活動報告会では、共催という形でのご協力、そして支援金のご寄附をいただきましたこと、実行委員会を代表してお礼を申し上げます。

私どもの活動を、東本願寺の多くの関係の方々に知っていただきたいとの願いから、これまでの活動内容と活動を通して見えてきた今後の復興の問題について、掲載させていただきます。

### 活動のはじまり

「大変なことになった」、二〇一一年三月十二日の福島第一原発一号機の爆発をテレビで目撃した時の衝撃は今でも忘れることができません。チェルノブイリの事故の時はリアルタイムでの絵面はなかったので、「ソ連という特殊な国の出来事」ということで済ませていましたが、まさか同じことが我が日本で起こるとは信じられませんでした。

この後、日本の政治や行政が混乱に陥ったことは記憶に新しいところで、政治家や東京電力に対しての批判が噴出しました。しかし、ただ批判をしていても子どもたちは守れません。漠然と原発を許してきた、その責任の一端は私たちにもあるはずです。そのため、福島の子どもたちを守り、未来の復興福島を担う子どもたちを育てる、このことを目的に多くのNPOが協力して作ったのが「ふくしまキッズ実行委員会」です。

実行委員会のメンバーは二〇一一年三月末から個別に議論を重ね、五月に最初の実行委員会を開催するときまでには、従来の自然体験事業を基に林間学校を開催する体制が作られ、現地北海道各自治体の協力の約束も取り付けられており、受け入れ態勢は出来上がっていました。しかし、最大の問題は、一ヶ月にものぼる長期間の子どもたちの宿泊費や交通費、そして、活動の資金をどのように確保するのかということがありましたが、「何があっても大人が協力して子どもたちを守る、それが今を生きる大人の使命だ」という強い覚悟をもって活動はスタートしました。

動いてみると、個人で百万円単位で寄附してくれる方、中には長野県松本市開明小学校の子どもたちのように「同世代の福島の子どもたちを助けたい」と家のお手伝いをしたお金を積み立てて送ってくれたり、本当に多くの方が支援金を届けてくれました。また、北海道庁が子どもたちの往復の交通費を負担してくれることや、活動拠点とした北海道七飯町が宿泊費を補助してくれるなど、多くの自治体が協力を申し出てくれました。

六月に参加者募集が始まると、ネットでの先着順申し込みだったために、募集開始当日には参加希望者が殺到し、ネットがパンクしてしまいました。当初予定したのは二百名でしたが、「それで間に合うほど福島の状況は簡単な状況ではない」ということがわかってから資金集めに奔走し、そのおかげで、六月中旬にはいると、「ふくしまキッズ夏季林間学校」のことが新聞やテレビで報道され、私たち以外の多くの団体が福島の子どもたちを全国各地で引き受けることを表明し、その情報をキャンセル待ちとなっているご家庭に流し、全国各地での引き受けが進んでいきました。

また、外国人記者クラブでの会見などが功を奏し、我々の支援金募集に外国からも協力が来るようになり、六月末には米国に本部があるジャパンソサエティなどから多額の寄附が寄せられることが決まり、最終的には申し込みのあったすべての子ども、五百十八人を引き受けることが出来たのです。

### 活動が生み出したもの

夏の活動は各NPO間の連携が最も重要なファクターでした。もちろん、団体間の意見対立はありました。各NPOの体験活動に対する基本的な考え方や、組織活動の文化も違いますから、それは当然のことです。それにもかかわらず連携協力がスムーズに行ったのは、何と言っても「子どもたちを守りたい」という想いがお互いに強くあったことが大きかったと思います。

そして、それら以上に大きかったのは、子どもたちを引き受けてくれた北海道各地の地域社会に「福島の子どもたちを引き受けることによって元気になった」という成果がすぐに現れたことです。たとえば、百六十世帯、住民約三百三十人の小さな漁村、松前町の西の端の原口地域に子どもたちを引き受けてもらった時のことです。この町に子どもたち約三十人が五日間滞在したのですが、町に子どもの歓声が響きわたると、地域の人たちの顔に喜びがあふれたのです。

それは松前だけではありませんでした。道内各地を旅した子どもたちは、行く先々で温かく迎えられ、その土地でしかできない経験を重ねるとともに、そうした地域は少子高齢化が進む地域であるため、向かいいれられた子どもの笑顔がその地域の大人たちに活力を与えたのです。

裏面につづく

## 表面のつづき

最大拠点となった七飯町大沼地区では、子どもたちを喜ばせようと、十数年前に姿を消した盆踊りを復活させるために地元有志が協力して準備に汗を流したことで、長く途絶えていた昔ながらの地域の絆や良さを確認し、福島の子供たちが帰った後で、住民から盆踊りの継続を望む声が町役場に多く届けられたということです。

このことは今回の活動の中で予想以上の大きな力となりました。東日本大震災と原発事故という未曽有の災害、悲しみがふくしまキッズ事業のきっかけとなったことは間違いありませんが、その子どもたちの笑顔の輝きは、道内各地の人たちの気持ちを結びつけ、「確かな絆」を生み出したのです。

## 子どもたちの笑顔と「自力作善」

こうして夏の活動は八月末に終了し、その後、冬の活動（北海道・神奈川・愛媛）、春の活動（北海道・神奈川・長野・岐阜）と引き受け地は広がり、活動は続いています。この四月で活動開始から一年がたちますが、当初から「最低五年はやる」という予定をたてて動いており、その継続の力となるのが、冬・春の各地でも夏と同じように起こっている「人々の気持ちを結びつける」という子どもたちの笑顔の輝きです。この「笑顔」の持つ力を通して、私は今後の我々の社会の復興に向けた大切なことを学んだ気がします。

子どもたちは笑顔を見せると大人が喜ぶと思って笑っているわけではありません。自然の中を走り回る、人が自分のことを大切にしてくれる、仲間が出来る、そうすると、ただ自然と子どもの中から笑顔があふれ出るのです。そして、その笑顔は弾けるような笑顔で、本当に輝いているのです。

今回、福島の子供たちの支援にかかわって、子どもたちの「笑顔」を目の当たりにして、ふと浮かんだのが「自力作善でないもの」「他力」という言葉でした。よく私の父が「自力作善の人には成るな」と言っていたのを、なぜか思い出したのです。

私の父親は福井の生まれで、その実家が真宗大谷派の門徒でしたから、毎朝仏壇に向かう祖母と比べれば、かなりいい加減な信心ではありましたが、法事のときは欠かさずお寺に参り、私もよく連れて行かれました。映画「三丁目の夕日」に描かれている一九六〇年前後のことです。

私が青春時代をすごした一九七〇年代は「家族という縛りから逃れて自立する」という精神が当時の若者の流行精神でした。そのため、祖母が良く言っていた「他力本願」などというのは馬鹿げた考え方で、父がよく言っていた「生かされている」という言葉もくだらないとバカにしていたものです。

しかし、人は歳を取ると、よほど鈍感な人でなければ、「自分を超えた何か」に気がつき始めます。それを私が強烈に自覚したのは一九九五年の阪神大震災の時でした。尼崎の実家が被災し、私の卒業した中学・高校が神戸であったため、友人が多くいたので、震災後すぐに神戸に入ったのですが、その時に目にしたもの、経験したことは、今まで確かだと思ってきたものが自然の前にいかに無力なものかを思い知らされました。

そうした体験から、私は一九九五年の阪神大震災を契機にNPOを作り、その延長線上で今回の二〇一一年の東日本大震災をむかえましたので、阪神大震災のときには見えていなかった色々なことが見えてきた気がします。

次号につづく

## 久留米教区三潴第三組の取り組み
# 安全な水を福島へ届けたい

三月十一日に起きた東日本大震災によって受けた甚大な被害のなか、福島第一原子力発電所から放出され続ける放射能汚染と被曝、遅々と進まぬ復興など、先の見えぬ不安の中に暮らす被災地の方々への思いをかたちにしたいと久留米教区でもいくつかの支援活動が行われている。その一つに三潴第三組の取り組みがある。

仙台教区、福島県二本松市の眞行寺衆徒である佐々木道範氏と被災地現地報告会を通じて交流を持った三潴第三組養福寺住職の大屋徳夫氏は支援の内容について事前に相談したという。

震災から一年が経とうという時期であり、復興に向けて状況が変わりつつある被災地支援のあり方については、今何が求められているのかを十分に聞き取ることが必要と判断した大屋氏は、佐々木氏との話し合いにより福島に水を送ることを支援活動とすることを決めたという。

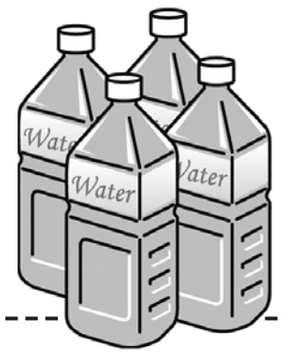
衣類や食料品をはじめ、生活に欠かすことのできないものの代表的なものとして水があり、とくに口にするものは安全なものが求められる。幼稚園を運営している佐々木氏の「安全な水を子どもたちへ」の願いは切実なものがあり、それに応えたものだ。

できるだけ息の長い支援を続けていきたいとの考えから三潴第三組の組会で支援内容が諮られ、組内十二ヵ寺で協力することが決定された。2ℓ入りの水のボトル十二本を十ケース、毎月八日に現地に届くように一年間送り続ける支援活動が始まった。まずは一年間と期間を設けた理由は、被災地の復興の状況によって求められる支援内容が変わるとの配慮からであり、その都度相談していくことを考えているとのことである。

毎月八日に佐々木氏のもとに届く九州の水は、「安心して子どものミルクを作ることができ、助かります」との母親たちの声によって受け取られているという。

被災地を支援する活動として、福島の子どもたちの健康を守ることを望む声である。

全国から福島県に届けられた飲料水（現地復興支援センター提供）




**東日本大震災「現地復興支援センター」では、引き続き、飲料水の提供を呼びかけておりますので、皆様のご協力をお願いいたします。提供方法等の詳細は、本紙面下欄をご覧ください。**

## 「現地復興支援センター」ホームページ
## http://fsc.higashihonganji.or.jp

ホームページ内のブログでは、最新の現地復興支援センターや各教区のボランティアの活動日誌に加え、「ボランティアの募集」「救援物資のお願い」等についても随時掲載し、被災者の方々に対する支援活動をお知らせしています。

当派の寺族、門徒、関係学校在学生又は卒業生であって、東日本大震災へのボランティア活動を希望される方で、現地復興支援センターのサポートを希望される方は、センターまでお問い合わせください。

## 福島県の被災者の方々に飲料水をご提供ください

福島県では、引き続き、乳幼児や妊婦を中心に、安心して飲むことのできる「飲料水」の需要が高まっております。

災害救援本部では、特に福島県に住まわれる方々への支援として、全国のご寺院・ご門徒に対し、「飲料水」の提供を呼びかけております。

皆さまのご協力をお願いいたします。

**提供方法**

飲料水（１本あたりの内容量や規格については問いません。）を**直接「現地復興支援センター」（下記参照）までお送りください。**

**なお、提供いただく際の費用につきましては、大変お手数ですが、各位でご負担いただきますようお願いいたします。**

**東日本大震災「現地復興支援センター」**
〒983-0803 宮城県仙台市宮城野区小田原1丁目2番16号［仙台教務所内］
TEL：090-7345-5049　FAX：022-297-2827　ホームページアドレス　http://fsc.higashihonganji.or.jp/